



# 中高生とともに差別と闘う

## 『お父さん大好きっ子』

吉成タダシ



どんよりとスツキリ

「小学校のあるとき、お母さんに、『私は何でこの地方別なの？ 私の自宅の住所は〇〇(地区)じゃない地方別なのに、何で私は〇〇(地区)の行事に参加しなきゃいけないの？』って一回訊いたんです。そのときにお母さんは、私が〇〇が地区っていうことに氣ついたと思っただんですね。父が地区出身だから。」

父は母と結婚する前に、地区出身ということと結婚差別を受けたという話を、私はそのとき聞きました。それを母から泣きながら話されるんですけれど、いまひとつピンとこなくて。

けど、『もつこの話は触れない方がいいのかも知れない』っていうふうは何となく思っただけ。よく分からないんですけど、自分の住んでいる所の話ではないようにしようと思っただけ、中学校に入学しました。

ところが中一で部落問題についてはつきり認識して、『あ、こういうことだったのか』と、『今まで母があまり触れようとしなかったり泣いてたことは、こういうことだったんだ』というのを、何となくそのときに認識したんです。

実はこのようなケースが増えていかと心配しています。ママの場合は、中学生になって部落問題学習に出会ったので小学生のときの謎が解けたわけですが、地区に対してマイナスイメージを持ったまま、『何かよく分からないけど、どことなく触れてはいけないこと』として蓋をしてしまい、謎

が解かれないままになってしまっているケースが増えていかと思うのです。その謎がスツキリ解ければどうってことないことも、明確に学ぶ機会がなくなれば、時間の経過とともに、どす黒く重い固まりとなって腹の底にどんよりと沈んでしまします。もしそのまま大人になって、いつかどこかで出自を知らされたり暴かれたりしたとき、絶望し、誰にも相談できず、我が親やふるさとに背を向け、恨むようなことになりはしないでしょうか。やはり、本当のことを正しく知らされなければ、と思うのです。

### お父さん大好きっ子

「みなさんにはちよつと気持ち悪がられるかもしれないんですけど、私はお父さん大好きっ子なので、お父さんの話をしますね。」

お父さんは産まれてすぐ、一週間後にお母さんを亡くしました。私からみてお祖母ちゃんに当たる人は、父を産むときに、もう多分長くは生きられないって言われて産んだんだそうです。父はお母さんをすぐに亡くして、そのまま成長していきました。それで中学に入学した日に、今度は父親を亡くします。病気で。だからもう中一の時には両親がいない状態で、お祖母ちゃんに引き取られて育つたと私は聞きました。

そのなかで、大学に行く話もあったそうなんですけど、お祖母ちゃんがお金が出せないっていうことで就職して。それで地道にやってきたんです

けど。多分その中でいっぱいいろんな挫折もあったでしょうし、中一で両親を亡くすっていうことが、どれだけつらかったかとか、大学にどれだけ行きたかったかとか、私には想像を絶します。もうそれは大変だったんだらうなっていう、こんな言葉でしか言えないんですけど、すごい壮絶な人生を送ってきたんだらうなっていうことは思います。」

ママのお父さん、厳しくて、でも豪快で明るくてやさしくて、そして負けず嫌いで、自分のことは置いといていつも他人を優先するような方でした。また、何かをやるうとするとき全力で応援してくれる、腹の据わった方でもありました。けどママが語った話を他人にしているところを私は見たことがありません。つまりこの話は家族秘話であって、それを口外することで受ける同情を好んではいなかったのだと思います。

お父さんの口癖はいつもこうです。「自分の思ったようにやりなさい」それ以上は言いません。でも、この言葉の奥にどれほどの思いが込められているか、それを感じとれるからこそ、「お父さん大好きっ子」になったのだと思うのです。

どこの家庭にも、その家族にまつわるストーリーがあるものです。そんな話がこの家族でも素直にできれば、その家庭の見せる表情も少し変わってくるのかなと思うのです。

### みんな本当に思ってるの？

「そんなときに本当に好きな人と出会って、けど結婚差別に遭って、結婚できなくてっていう話を聞いていたときに、みんな、『差別は駄目です』とかやっぱり言いますよね。当たり前ですけど、『部落差別は良い』とか、そんなこと批判されるし絶対言わないじゃないですか。けど、たぶん友達が言った言葉が、私のそのときの癪に触ったんだと思います。『それはきれい事だ』とか、『みんな本当に思ってるの？』みたいなことを言った記憶があります。『本当に思ってるの？』っていう思いが強くて泣いちゃったんです。うね、そのとき。」

こんなママの語りを聞けば、なぜママが授業のなかで泣いて訴えたのか、その思いが汲み取れるのだと思います。ママだけではありません。ママの向こう側にいる、ママにつながるたくさんの人。お父さんがどんな思いで生き抜いてきたのか。お母さんがそれをどう受けとめながら共に過ごしてきたのか。お祖母ちゃんがどんな思いで命がけの出産を覚悟したのか。男手一つで子どもたちを育てながら、道半ばで病に倒れたお祖父ちゃんの無念はどうだったのか。一つ一つの出来事は、その時々思いを詳しくは聞かなくても、泣いて訴えるママの姿に、誰もがその思いを真剣に受けとめるのだと思うのです。それが、『本当のことを正しく知る』ということだと思ふのです。

(次回「自分たちで作らあげる」)